

追悼句集『春のおもひ』 翻刻

—松本清張『砂の器』の舞台、亀嵩における子琴とは

山口 政幸

ここに翻刻したのは、奥出雲にある絲原記念館が所蔵している『春のおもひ』という追悼句集の草稿である。記念館による分類番号でいうと、古文書18-2-059となる。なぜ近代文学を専攻している筆者がこうした専門外の江戸後期における追悼俳諧を翻刻したかという点、標題にも掲げた、松本清張の『砂の器』の舞台となった亀嵩と関係してくる。ご存知のように、『砂の器』では、被害者の残した「カメダ」という言葉から、秋田の亀田、そしてこの奥出雲の亀嵩へと、今西刑事の捜査の手は伸びていく。そして殺された駐在の人となりを知るために、地元警察の計らいで、彼は桐原小十郎という人物を訪れる。桐原老人は、村の産業である高級算盤の製造業者で、生前の三木巡査を知る人物であった。貧しい農家しか見ないような土地柄に、本式の茶室まで備えた桐原の家の風雅さに、まず今西は驚きを感じるが、彼が次に耳にしたのは、三木巡査が桐原との付き合いで俳句を作ったこと、そしてこの土地が昔から俳句が盛んであったことだった。

「いや、この土地は、がんらい、俳句の盛んなところでしてね。毎年、松江や米子、それに浜田あたりからも、わざわざ俳人がここに集まるくらいだし。というのには、昔、子琴しきんという芭蕉ばしやうの系統けいとうを引く俳諧師はいかいしが、この出雲にくだらつしやつて、私の先祖の代にこの邸に長くおらつしやつたことがござりました。そげな因縁で、松江藩の文化的な藩風はんふうもあつ

て、この亀嵩は俳句でも知られてきたのでし」

〔『砂の器』第六章 方言分布 4 〔松本清張全集5〕〕

今西の俳句についての趣味は、あえてここでは触れないでおこう。というのも、筆者が気になったのは、この子琴という江戸時代の俳諧師が実在するのか、ということであったためだ。同じように、本当に、桐原老人の言う如く、亀嵩の地に滞在したのか、ということだった。

この当時の松本清張が、実際は現地に赴くことなく、取材を地元の新聞社の地方局員などに委ねていた点については、すでに拙稿「秋田に行く今西栄太郎―『砂の器』における取材」(『日本文学の空間と時間』収録 二〇一五・一、勉強出版)においてその一端に触れておいた。この亀嵩についても同様で、執筆に際して、清張がこの地を訪れ取材をしたとは考えられない。したがって、この子琴という芭蕉の流れをくむ俳諧師という存在も、地元を取材した資料のうちから取捨選択され、小説中に書かれていったものだとは推測されるのである。しかし、長い間、この子琴という俳諧師についての情報を得ることができないでいた。

が、それが各務支考を祖とする美濃派の十世道統の五竹庵であることがわかり、また、その編纂にかかわった追悼句集の書である『春のおもひ』が、先の絲原記念館という鉄師の家系の博物館に所蔵されているらしいことがわかって来た。絲原家に関してここで詳しく述べるゆとりはないが、江戸時代に櫻井、田部家などとともに、この奥出雲一帯において、たたら製鉄によって財をなした旧家であり、その文化事業を集積したものが昭和五十五年に開館された絲原記念館なのであった。

この絲原がもともとあった地を古名で「湯之邊ゆのへ」と呼んだが、これら大馬木地区に残る古典文芸に関して、「湯の

迥の文芸」としてまとめられた記事が、横田史談会誌である「奥出雲」という雑誌に載っている。紹介しているのは、地元の郷土史家の第一人者である高橋一郎氏（故人）であって、『春のおもひ』という追悼句集の存在も、この記事によって知ることができたのである。（「奥出雲」第八十三号、昭和五十七年三月）

しかしながら、肝腎の『春のおもひ』という本自体を見つけないでいた。『春のおもひ』の存在については、高橋氏が写真入りで、先の「奥出雲」に載せており、詳しくその内容まで紹介している。またそこには、京都蕉林書房橋屋から出版されたとも記載されていたため、本として出版された事実は疑いないものと考えられた。しかし、絲原の記念館には、草稿の形で残されたものしか存在しなかったのだ。絲原家の祖先にまつわる追悼句集であるにもかかわらず、その存在を確かめることができなかったのである。

先述の通り「奥出雲」というこの雑誌も、もともとは横田史談会という奥出雲地域の郷土史の研究会の「横田文化」が母体となったものだった。そしてこの横田という地は、元来、絲原家の製鉄産業で栄え、大正期には同家十三代目の尽力で鉄道が敷かれるなど、絲原との関係が深い土地柄でもある。地元中学の校長をされた高橋氏も、もともとこの絲原記念館の立ち上げに携わった人物なので、『春のおもひ』も、あるいは個人で所蔵されていたのかもしれないが、高橋氏側とのコンタクトは叶わず、本に関する情報を得ることもできないままだった。

そのため、やむを得ず現段階で、閲覧可能な、059の草稿を翻刻することにしたのである。目的は、この俳諧書の中に、『砂の器』で書かれた通り、亀嵩に滞在した子琴（以下、『春のおもひ』の記述に従い、五竹庵と呼んでいく）の痕跡をはたしてたどることができるかどうかを検証するためである。

実はそれは、五竹庵自身が記した、序詞において、「ことし予が亀嵩の里に留杖」とあることから、すぐにはつきりしたのである。文政七年、亀嵩の地に五竹庵こと、子琴が滞在していたのは、間違いない事実であった。あわせて

追善法要をおこなった「聞善精舎」というのも、今も亀高にある浄土真宗の寺である聞善寺に間違いないことが確かめられた。つまり、亀高の地に、五竹庵が旅の途として立ち寄っていたことを知った、絲原の第九代目当主である忠三郎（本文では、俳名の東下）らが大馬木からわざわざ亀高に来て、その聞善精舎で、先代の三十三回忌を含めた三故人の追悼をおこなった、その追悼句集が、この『春のおもひ』にはかならないのである。大馬木から亀高の距離は、およそ十六キロ。この追福を兼ねた句会における亀高側の出席者が、大きく他の地域を上回っているのは、聞善寺の場所が、亀高の中心地にあるためだが、一方で小説中の桐原老人が誇らしげに語っていた、当時の亀高における俳諧流行が、決して嘘ではなかったことを証明してもいるだろう。ついでに言えば、この九代目の忠三郎は、婿養子として、現在の絲原の礎を作り上げた人物でもあった。大馬木から、現在の絲原のある雨川地域へ、移動して事業拡大を成し遂げたのも、忠三郎のときである。

しかしながら興味深いのは、そういった財力のある絲原に、五竹庵が呼ばれたわけではない、という事実であろう。いまだ道統にならないでいる五竹庵は、こうした長途の旅による修行を課せられていた。彼が、十代目の道統になるのは、この五年後のことである。昭和四十六年三月に刊行された、岐阜大学教育学部による郷土資料（二）に載せられた『花かすみ』の徐風庵による序詞によれば、その偉大な祖父を継ぐために若くから苦勞を重ねた五竹庵の様子が伝えられており、道統を受け継ぐものの厳しさが見て取れて興味深い。この在世の長かった祖父四世五竹坊の時、美濃派の俳諧では、再和派と以哉派の対立と分裂が起こっている。

それではそういった五竹庵の、亀高での滞在先はどこかということになるが、それはこの『春のおもひ』では、碩獅が「子が草菴に留杖を幸ひ」とあり、碩獅の「草庵」であることが読み取れる。碩獅は、聞善寺の住職である多賀宜啓の俳号であるから、聞善寺関係のどこかに滞留したと考えられるのだが、これとは別に、桃醉こと山根又十の山

根家には、下る事八年後に建てられた九尺庵と呼ばれる茶室があり、山根家ではそれが、先の『砂の器』における桐原小十郎のモデルとなった茶室であると信じられている。昭和四十二年十二月に発行された『亀高村誌』によれば、五竹庵は再度この新築された茶室に呼ばれ滞在に及んだとあるが、これらの真偽に関してはいまだ不明であり、調査中である。一つ言えるのは、場所として山根家は聞善寺と隣り合う位置関係にあり、五竹庵の滞在先としての物言いが年代的にも位置的にも分有、あるいは混在されていたという可能性も十分考えられるだろう。繰り返すが、これらの調査については今後に譲りたい。

なお後日になって、この『春のおもひ』が、早稲田大学が所蔵している『蘭のかほり』とまったく同一の内容であることが判明したが、どうしてそういったものが生じたかについては、今のところ、いっさい不明である。画像による確認のみだが、大きく異なるのは、最後に徐風庵による一文と発句とが付け加えられている点だろう。書肆はやはり、京都蕉林書房橋屋である。また翻刻を始めた段階で、絲原記念館の側から、より決定稿に近い『春のおもひ』の存在を知らされたが、その分類番号026はあくまで参照として使用するのに留めた。翻刻に関しては、旧友である古賀一正氏の手を煩わせ、絲原との交渉並びに打ち込みに関しては、若槻昭宏氏の手をお借りした。若槻氏は亀高算盤を経営している一族で、先の山根家とは、縁戚関係にある。古賀氏並びに若槻氏への深謝はもとよりながら、本稿に関する不明な点や落ち度の責任は、すべて筆者である山口にあるのは言うまでもない。最後に、掲載のご許可を賜った財団法人絲原記念館に感謝の辞をささげたい。

草稿の状態は、表紙が袋とじて、裏に文字が透けているが、判読はできない。表には、「丁数三十七枚内 黒□上紙共三十六 うち紙一枚」と書かれてある。袋とじの丁数は、表紙を抜かすと、記載にある通り三十七丁であるが、三十六枚目の裏には、「徐風庵宗道御祓」と書かれた付箋が貼られており、徐風庵によって末尾の言を入れる箇所が、

あらかじめ指定されていたことが判る。なお、三十七丁は表裏ともに白紙である。

本誌に記載する上で、【二】表とは、一丁目の表であり、【一】裏とは、一丁目の裏を指している。なお、【十四】裏、【三十一】裏、【三十二】裏、【三十三】裏に付箋があり、それぞれ文字が書かれているが、判読が困難であった。

翻刻の基準は以下の通りにした。なにより、筆者の如きこういった文書に接することの甚だ少ない読者をまず第一としたために、専門家からすれば噴飯に近い事柄が散見されようが、寛恕を願う次第である。

一、変体仮名は現行の平仮名に直し、送り仮名を（ ）内に、歴史的仮名遣いで補った。

一、濁点を打ち、適宜、句読点を施した。並列する名詞の間には中黒の・を加えた。

一、異体字・俗字は正字に直した。その際、常用漢字にあるものはそれに従った。

一、難読とも思われる語には、現代仮名遣いで振り仮名を付けた。

一、判読が困難な不明箇所は□とした

最後に、わずかだが、この『春のおもひ』から読み取れたことを、個人的なメモ風に書き留めておく。

一、短歌行という、美濃派の創始者である支考の案出した連句の形態が、二十四句のものと十二句のものと二つ見出せる。後者の石明のものが「短歌行一折」と明記され、句の数も十二句とちょうど半分に抑えられているのは、本文中にある通り、残りがすでに失われた可能性を示唆するとともに、主催者の東下の養父である以文への敬意の表れとみなすことも可能だろう。

一、東下はこの当時六十四才。東保と呼ばれている彼の息子十代徳右衛門は、三十二才である。五竹はそれを、絲原家の繁栄のしるしとして、「子雀も」と自身の句に読み込んだ。五竹は東下より十六才年下の四十八才。五竹庵は、絲原親子の中間位置で二人を見ていたように見えよう。

一、東下が、敬慕する先代の追善のため、この雅筵を催したのは間違いないが、そこには、若くして客死を遂げた朋友徐行に対する哀惜の念も、深く関わっていたのではないか。「膠漆の因み」と呼びあつた徐行は、のちに養父となる以文の実弟でもあつた。その辺の事情は、最後に書かれた「はからずも此家の養子となり、予は爰にとゞまり、徐行は旅に魂をとゞむる」によく表されている。そしてこの「いづれか幻の世ならざらん」には、俳諧という文学形式に則つた追悼というものの真髓が、時空を超え現代の我々にも十分響き渡るように思われる。東下はこの翌年に没した。

【表紙】

丁数三十七枚内 黒□上紙共三十六

うら紙一枚

【二】
表

追悼
俳諧
春のおもひ
全

追悼
俳諧
春のおもひ
全

【一】裏

壺中軒

遅日庵 追善

夜々庵

春のおもひ（紫石摺として）

美濃 徐風庵 刪正

五竹庵 点検

出雲 糸 東下 編集

【二】表

序詞

棄^{すた}れたるを興し、絶^とたるを

つぐは人の人たる道とかや。

爰^{こゝ}に雲州仁多郡大馬木

なる糸原氏東下子、此集^{このしゅう}を

編む。其^{これ}、絶^とたるにもあらず、

すたれたるにもあらず、家景

繁茂^{さか}して此地^{このち}の郡吏なり

【二】裏

とぞ。父以文叟をはじめ
徐行・石明といへるも先のとし
物故ありて、生前風雅に
志厚かりしより、風雅を
もて追悼に備（こ）んと志願は
ありながら、此地（こ）に風雅の
友稀に、他邦は道隔りて、
思ひをとげざりしとなん。

【三】表

ことし予が亀高の里に
留杖を伝へ知り、社友をもて
其（のまゝ）叫（こゝろ）しきりに、法筵を開
かれ侍る。それや、其父（こ）
以文叟、公務の余力は風雅
に人和の道を好み、徐行は
舎弟になん侍るよし。若き
より画と俳諧に遊んで、

【三】裏

画はもて勝地の風情を
写し、句はもて美景の
風姿をもとめんと、播磨
路やよし野、花に旅立れ
しも、須磨・明石の詠を
名残に、旅にあわれを
とゞめられしは、はかなきを
世にしめすなりけん。折から

【四】表

なげきの追悼に諸風士
より送り来れる章句を、
蝶の夢と題して残れるを、
此卷に加へて其志を
残る、も、けふの供養の一つ
ならんか。はた、石明といへるは
以文叟の家務を補佐して、
殊に風雅を好み、此国に

【四】裏

しのぶ庵魚坊といへるに導かれ、折ふしの杖を招きて風雅を語らへりとぞ。
難波・花洛に吟行して、
再和・森々の両師にもまみへ、
水雲の志深く、日記に
風流をとめらるる道に
遊ぶ事の薄からずして、

【五】表

今に其世⁽²⁾のおしはかられぬ。
けふや三人の遠忌を合せ⁽¹⁾
弔ひ、桜木にのほせ、他方の
風子に是を送りて、
滅後の孝養に其信⁽²⁾の
あらはるゝ、靈魂、など、
めで給はざらんや。所は
亀嵩なる聞善精舎

【五】裏

にして、火とぼす花は
そこに薫りて、百千の
鳥も経(つ)を読らんか。其(こ)あら
ましを巻のはじめに
しるせよと乞はれ、辞するに
辞しがたく、旅窓下に
かいつけ侍る。

五竹庵

文政七甲二月

印

【六】表

慈父壺中軒、尋常まめやかに
して、聊(ちやう)郡吏(ごん)の役を勤(と)しも
世の聞(こゝろ)へ高く、褒賞の恵みを
忝(かたじけなく)ふし、身に应ぜざる長吏の
格を蒙りしも、ひとへに
国君の恵みなりけり。さはいつ
まで草のいつまでもと祈りし
甲斐も、寛政十年の十月、風木の

【六】裏

悲しみを抱き、桃李ものいはぬ
むかしとなりて、はや廿五年の
星霜を重ねぬ。生前は風雅を
好み、花におかしく、鳥に淋しく、

窓に雪見る夕暮は、早梅、色養
に笑みをふくみ、軒に月もる

暁は、来鳴鶯の初音を待て、

四時の造化に風月の心深かりしも、

我は其道にたより得ずして、

家子を守りて老行けふの嘆き

とはなりぬ。ことし美濃なる

五竹庵師、亀嵩の里に留錫を

聞。爰に啐啄の時至れりと、社友

の諸風士を招き、追悼の法筵を

ひらくに、今も其世のしのばれ

侍りて、

【七】表

塚にけふ春も枯野の思ひ哉

東下

身にしむ恩の今別れ霜

東保

子雀ももふ巢ばなれを囀りて

五竹庵

舟間の河岸のしづか也けり

里へ

月にくむ円居の酒に初涼し

蘆洲

司召すむ任国の秋

櫻川

流鏑馬に嘉例の神事人群て

逸性

土産買ふほどよける橋銭

昶

【七】裏

孝行を余所に誉れとなしたらず

鳴砂

ことしと明て注連に東風吹

文三

言の葉の花に和らぐ秋津国

桃酔

ありがたかりしけふの御勸化

白主

また落ぬ隣の風呂の呼使ひ

花亭

寒の替りに珍しひ雨

玉峯

出る比はおのれと知てなめす、き

常太

親にそむいてふたり隠れ家

幽雅

【八】表

恥しはづ残る枕の比翼紋
 袴はかまざわつく式日の礼
 宵は月菊はあしたに香を配り
 染る梢をわたる色鳥
 白川の関に笠着る墨衣
 娘に似た子振かへり見る
 咲花に其名はちらず法の場ば
 二十五年も陽炎の夢

藍水
 松人
 一枝
 壺滴
 其明
 みへ
 碩獅
 汀柳

【八】裏

右、短歌行

祖父以文君、闇良忌にあたり
 給ひ、此日追福(2)のいとなみを設け、
(か)聊菩提を弔ひ奉りて
 流れ汲む恩に手向ん春の水
 けふやたらちをの追福をいとなみ
 給へるに、いまそかりし世の恩愛も

東保

おもひ出_られて

【九】表

一二りん摘も名ばかり手向草

女
里々

叔父の追悼に

散花と供_{マツ}に泪や野辺の供

常太

糸原壺中軒のあるじ在世の

比_{ころ}は、傍_{かた}にありて親しみを重ね、

所_{ところ}を隔_へては雁魚の音づれ深

かりしが、黄泉の客となり給ひて

【九】裏

はや廿五回忌とはなりぬ。

孝子東下主人、追善を営み

給ふに、そゞろむかしのしのばれ侍りて、

春雨や幾くり返す筆の跡

櫻川

前書ありて

散てなを香は残りけり糸桜

一枝

以文雅公は生得閑雅の行ひに
して、世の聞へ浅からざりしが、

【十】表

惜むべし、いまだいそじの齡にも

足らでむなしき名のみはとゞめ

給ひぬ。ことし美陽なる五竹庵

宗師留杖を幸ひ、副子東下

のぬし追悼の志願あるより、

予もともぐにすすめてけふの

法筵につらなり、在世の恩沢に

寸情を述待るのみ。

其魂と仰ぐや月も花の上

蘆洲

【十】裏

孝子糸原氏東下子、賢父の

追悼をもふけ、雅筵を開き

給ふよし、深情のせふそこに、

【十一】表

とりあへずまかりて在世の

因みの一しほになつかしく、

陽炎に面影立や塚の苔

冬嶺

以文風士、其身⁽²⁾在世には公私の勤⁽²⁾

しげき中に、風雅の道にも志

深かりしより、義子東下主人の、

切操に追悼をいとなみ給へるに

一章をさ、げ、聊^(か)追福の志^(ママ)しを
述⁽²⁾待⁽²⁾る。

鶯や其名は耳に有ながら

逸平

副子東下主人、孝養の志深く、

賢父世を去り給ひてとし月を

重ねしが、ことし追福の雅筵を

ひらき、旧交のたれく、他邦の

すき人を招きて、言葉の花に

【十一】裏

靈魂をなぐさめらるゝにぞ、
魂迎ふ空うやくし呂りよの調

桃醉

壺中軒のぬしは、其性温淳(2)
にして、おもき公務の役を勤め
専ら衆人を撫育し、日頃は
風雅の淋しみに遊んで花鳥
月雪の詠めに乏しからざり
しも、終に其名を慕ふむかし
とはなりぬ。こたび孝子東下
主人、誠心の厚きより、しきりに
追悼の席を催ふし、ちりぬる
草々かい集め給ふに、予も
ともに其荷擔人(1)かたんにんとなりて、
牌前にぬかづき合爪し

【十二】表

奉りて、

陽炎のむかしや今に名は消へず(2)

汀柳

【十二】裏

幻の世とは諺に言ひふるせど、
命ほどはかなきはなし。

以文叟、世に在し比は風雅に
遊んでしたしかりしが、はや

五々の年回とはなりぬ。ことし

美濃なる五竹宗師、予が

草庵に留杖を幸ひ、副子

東下のぬし、孝心の誠より

追福のいとなみを思ひ立

雅筵をひらかるゝに、生前の

因みに拙き一章を靈前に

備へ、捻香し侍りて、

散し香の跡著し花の兄

碩獅

四 季

壺中軒以文

飼おける鳥を放ちけるとて

遊ばせんけふよりは名も麦うづら

【十三】表

荒砂に箒目きつと牡丹哉
こちの孫はあれかと覗く踊り哉
更る夜の鐘はものは鉢たゝき

夜々庵石明三十三回忌追悼

草

石明

初時雨あとは木の葉と降にけり
消へてきへぬ名したふ十月

東下

【十三】裏

舟のない時は徑に橋ありて
積揃へたり葺替の茅
弓張て歌に主しも老の影
霧に着そらす送別の笠
浦浪の田子を真向の芙蓉峰
堂の勸化に庫裡も再建
強られた酒にけふまで二日酔
落た帛紗に顕れし恋

五竹庵

文三

汀柳

東保

蘆洲

常太

櫻川

里へ

【十四】表

咲花に鳥も琴弾く春最中
夷長閑に逃し神風

桃醉
碩獅

右短歌行、一折

【十四】裏

夜々庵石明は親族にして、
公私の用の繁きを補て我家に
周公の徳を積み、日比は滑稽に
志し、しのぶ庵師にたよりて
父以文と共に楽しみを同ふし、
命終のとしは髪をおろし、

生涯のはかりごと、もなさんと
せられしも、はからざりき、黄泉
の客となりて、ことし清浄
忌とはめぐり来りぬ。我ため
には父兄にまさる荷恩なるを、
犬馬の老は積りながら九牛が
一毛も報びざることの嘆かしく、

けふや法筵を開き、靈魂に
侘侍る。^{マツシ}

厚き恩に手向は薄し山桜

東下

【十五】表

慈父君終焉の比は其悲し^②み

をさへうつ、なりしが、三十三回の

星霜移りて、東下君、追悼を

いとなみ給へるに、香花の労を

助け奉りて、

面影もおぼろゆかしや月の前

文三

【十五】裏

四 季

朧なるものの中にも柳かな

我宿は戸口ひとつに暑哉

鳴子かなさすが小鳥の馴もせず

明日の夜はいかなる夢かぬくめ鳥

古久
夜々庵石明

【十六】表

死して名をとゞむるは人の欲する

【十六】裏

所ながら、得がたし。しかるを石明

雅公、世に在し比の賢才、誰か

是をしらざらんや。殊に茶と俳諧

の道を楽しみ、再和・森々の両師にも

まみへて、人をおどろかせる秀吟

多かりしとかや。没後、追悼の

催しは有ながら、時来らざりしが、

ことし東下雅公の厚信より

諸好士を集め、今月卅日、法筵を

ひらき給へるにぞ、靈魂の悦び

おしはかられ、予も牌前にぬかづき、

捻香し奉りて、

弔ふ此日花も静に降にけり

蘆洲

夜々庵石明のぬしとは、ひとかた

ならざる因みありしが、おもへば

三十余年のむかしにして、いたく

【十七】表

病ふの床にふしながら、生死
ふたつをさとり給へるにや、
花曇どちらの道も面白し、と
風吟し、程なく世を去り給ひける、
其悲しみ今も思ひ出られて、

纓川

したふ日や心もともに花曇

石明老仙、世に在せし比は

此地に風雅の棟梁たりしが、

其かたいとのよりくには遠近の

風友をす、め置れしより、其

いと口のいとたへず、けふや

清浄忌の嘗あるに、

言の葉の花を接木の手向哉

桃醉

【十七】裏

三十余年のむかし、浄土の客と
なり給ふ夜々庵石明叟、生前

【十八】表

風雅の信厚く、再和・森々の

両師の会下に参じ、道に三條の

法あることを諭され、淋しみに

楽しみ、おかしみに遊んで、我曹がしちから

にも明暮あけくれにすすめられ、

道の端につらなるも偏ひとへに此叟このせう

の恩沢なりけり。けふや清浄忌

の牌前に捻香百拜して、

なつかしなつかふ昔まを花はなに泣日なみ哉

汀柳

夜々庵よよあんのぬし、俗談平話よこしまへいごの

風雅ふうがに遊んで、人ひとをおしへて

倦うざれば、若わかきは其人そのひとをしたひ、

老おいたるは是こゝを友ともとして、世よに

広く交まりしが、予よも其人そのひとに導みち

かれて、今は老後の楽たのしみとは

なりけり。けふや清浄忌せいじよんぎの営いみ

あるに、捻香頓首ねんかうとんすうして、

世を替へて又ふる花の浄土哉

碩獅

【十八】裏

香花を備へ靈位を営み、

妙なる法の花鳥に人々と共に

一章一句を手向、捻香九拜して、

三人り弔^マふけふや一すじ薫^マる花

五竹庵

古人之部

夢ならばさめよ、うつゝならば

され。此^のかなしみをいかゞはせん。父母

の喪にある悲しみはさらなれ共、

それは順ともいふなるべし。むかし、

【十九】表

石明と朋友の義を結んで千歳

の因みを約せしより、我を知る

ものは石明にして、石明をしれる

ものはわれなりと、五十余年の

交情むなしくなりて、石明は

【二十】表

亡跡や心もいとゞ五月雨
惜みても甲斐なし芥子の世やもろき
香の火も消る涙や五月雨
今は入梅のしめりに筆の跡悲し
はかなさよあ、夏の夜の夢なるか
梅雨にさへぬらさぬ袖を涙哉

カミタケ

桃流

、

一步

八代

臥牛

、

留耕園

今市

吞乙

、

乙鳥

【二十】裏

五月末の三日、父魚坊の風友
石明子におくれ、悲しさの余りに
短夜を長くも聞やほとゝぎす

今市 しのぶ庵

さい

出雲の国大馬木に住る石明の
ぬしは、風雅の旧識にして、過ぬる
とし交りを結びしよりこのかた、
月雪花の折ふし、処のたより絶
ざりけらし。しかるに、この春の比
より病ふに臥して、今ひとた
びはあはまほしきなど消息

【二十一】表

ありしもはかなく、五月の
未^マ、身まかり申されき。其終りに^シ
臨む比までもなしおける

句々、予に見せてなど友人に
言残せる道の信、感ずるに^シ
あまりあり。いかなれば去年

の冬は魚坊をうしなひ、

この夏は此人去りぬ。無常

迅速の習はし、次は我身^ガの

うへかとも思ひつゞけて、靈前へ

かくは備へ侍る。

その魂かいつやらの夜の時鳥

森々庵

【二十一】裏

右は其比諸君子より送り^シ
来れるが、央は紙魚の為に失て、^セ
残れるのみを出しぬ。

出席

各したしき追悼の吟は

あれど、四季の題を配りて

手向（てむか）に備ふ。

夕嵐畔こす浪の青田哉

まだ染ぬ野やした露の秋の色

【二十二】表

しら雲のちぎれ初けり秋三日

家建る中やあと先飛ぶ燕

しら露の夜ごと（よごと）に深き山家哉

行春や伸済（のびす）したる露の塔（た）

灯に風はありけり虫の声

蛸（たこ）や松に入日のさめる時

闇の奥二羽と成たる水鶏哉

山吹や浅き流れの水早し

【二十二】裏

川水を照らして流す螢哉

蚊遣火の跡吹返すあらし哉

芭蕉葉の露沢山にこぼしけり

、 亀高

碩獅

桃酔

、

汀柳

、

幽雅

、

其明

、

昶

、

壺滴

、

白圭

、

花亭

、

鳴砂

、 龜高

玉峯

、

逸性

、

みへ

【二十三】表

しら魚や昼から替る水の色
水鶏鳴くほどは水あり庵の背戸
長閑さやなびか登る朝煙
門番の肩摺て行く乙鳥かな
露乾く竹にさやけし朝の月

、
、
マハセ
ヨコタ
、
、
一枝
蘆洲
藍水
櫻川
松人

山吹や水にも影の黄色也
白壁に隣は白し煤払
美しふ掃庭へちる椿哉
花の世を空に見なして帰る雁
鶯や今朝一声は森の道
夜の明て蛙すくなき田面哉

文通名録

大谷
馬木
、
、
、
行脚
佛前開山
常太
文三
里急
東保
東下
五竹庵
松雨

【二十三】裏

老の夢ちぎれくの霜夜哉
朝顔やこよりにくゝる竹の垣
水鳥の水くさからぬ遊び哉

松江
朝日寺
カモ
昨非
桃花
麻嶺

【二十六】表

鶴も来て四五日去らぬ青田哉
内に居ては済ぬこゝろやけふの月
朝顔の沢山に咲く名残哉

ヨコタ
坂田
朝伍
見山
虎笑

蝶の夢

追悼

鶴鶴原の草やはらかにして

蝶の夢さめやすく、北邱山に

雲ねつて月の入時はやしとかや。

いかなれば家弟徐行、此弥生ならん

命を七十里の旅中に失ふ。

兄と生れ、弟と先だちて、かな

しき年月には逢ふことぞや。

阿父楽山におくれけるは二十

余年のむかしにして、其比はしも

【二十六】裏

かれはおさなかりしが、今や人となりて互の慈愛も浅からざるより、

【二十七】表

ひとりの母のこゝろをも休め、我が

ために掌中の壁なるものを、かかる

旅にはなどか趣アツきけん。いさまし

かりし馬の餞もまのあたり立ちさらで、

帰り来べき日の待まちる、心地ぞ

せらる。世はたゞ旅の旅にして、

夢のうちに夢見るにぞありける。

ちり果る花ともしらで須磨明石

首途の春にかまわる野送

徐な風から空の霞らむ

漆の乾く風爐を窺ふ

屋敷衆の供を廓へ誘まい状

縁まにしを結ぶ神の縁日

村雨は松に程まなふ晴上り

鶴に手柄の噂うわさとりぐ

注文の鱸も桶に月の秋

ふまへず減へらずに揃そろふ出代でがわ

以文

魚坊

石明

東下

何遠

洞李

行周

常太

路考

草肥

右十句表

【二十七】裏

終焉記

ことし弥生のはじめ、遅日庵の徐行
身まかりぬ。此⁽²⁾おのこや、生質^(マ)・志^(マ)し
閑雅にして、いとけなきより獅子門の
風雅をしたひ、隣郷老人に導かれて
此⁽²⁾一筋の細みをたどり、世法は
すべて俳諧なることをしれ
りしより、あるは書にさびしく、
あるは画におかしく、物として
捨⁽²⁾ることなし。此春⁽²⁾、頻⁽⁹⁾に吉野の
花にとおもひ立^(ち)、難波津・都の空
をも尋^(ね)はやと心にこめて、衣更着^(きさらぎ)

【二十八】表

廿九日は、雲たつてふ簸^ひの川の
ほとりを立出^{(ち)出^(し)}しより、播磨湯・
尾上・高砂など、そこかしこ吟行し、

【二十八】裏

摂州兵庫の津を過て、旅籠屋

何がしが裏座敷に一夜のかり

寝せしが、三月九日の朝、道の記

など認め侍りて、彼の盲杖桜は

枝栄へ花さけると書き、その下の

文字書べきとにや、纒に一点の

墨はつきながら一字を満たさず、

持ける筆の落るを見て、供しける

男どもあはてさわぎて介抱しけれ

ども、ふたゝび物をもいはず息絶へ侍る

よし。けふやなきがらを吾郷に

送り帰りぬ。ア、無常迅速の

習ひながら、かかるはかなきことのある

べきとは思ひもしられ侍らず、只に夢の

こころぞせられける。残せる道の記に

菜の花や眠さましつさそはれつ

と、路次の言捨ながら生前の

【二十九】表

名残となりぬ。一句の姿はととな

はねど、此世のねぶり覚し、

来迎の雲に誘はるといへる

にや。今はた、なつかしきまゝに書とどめ

侍りぬ。須磨の浦はいかに詠めつらん、

其風色さへ書終らで、一時の命、

いかにながらへざるぞや。齢ひも漸

廿五といへるが、かく短命ならんとにや、

常々はかなき事どもいゝあひ、

我、古人とならば塚のほとりに

一株の梅を植よなど、ひたぶるにいゝ、

置ける。季札が剣にならひて、

彼の塚に白梅の一重なる物を

うつし植。かなしき何にたとへん。

かゝる旅中に終りをとりけるも

宿世の因縁にや。古人も旅に死せる

【二十九】裏

ありとは聞ながら、老たる母のうら
みをそへ、はらかなのかなしびを
残し、いかなれとや風は吹ぬらん。
死にとて行や弥生を七十里

石明

【三十】表

道の記など認侍るとて、矢立の
筆をとりながら眠るとなく
息絶侍けるよし。おしむべし、
光陰の人をまたざること。此即
生前の志し、花に和らぎ、月に
清く、朝雲暮煙に世を觀じ

【三十】裏

ては物のなさけもことにふかく、
仁慈寛厚にして、都ての人も
惜み侍りぬ。予も生前の交情
わすれがたく、一章を送りて
聊寸情を述ぶ。されば、此人もと
より好けること草なれば、

月花に追福の法筵を催し、

一句一章の手向あらば、名真供養

仏の心にも叶ひ侍らんなど、

その兄以文字に申侍る。

亡跡の思ひや花の朝た夕べ

阿井

路考

弥生中の四日、松城の帰るさ、大東の
駅に宿り、夜もや、深更に及び
ぬる比、何やらん、人の物がたる声
夢のこ、ちにおぼへて、あしたに
その事を尋侍れば、大馬木なる

【三十一】表

徐行子身まかりしよし。こは

いかにとおどろきながら、

そのさたに暁かなし別れ霜

阿井

草肥

各前書ありて

ちる花は又も咲世に此別れ

阿井

何遠

なき便り春さへ袖のかわきかね

大谷

洞李

花の旅先へちり行身やあわれ

大谷

行周

こぼるゝは泪の雨とはるの雨

大谷

常太

【三十一】裏

亡跡やなみだにくれる春

大谷少年

竹三

むざんなり摩耶の嵐に苔む花を

カメケケ百人

道楽

雨ならで春も桜に泣く日かな

マキ

梅一

鶯の法花経に今わかれけり

マキ

快道

おしまるゝ花も弥生を名残哉

ヨコタ

無知庵

花の雪つもる弥生のなみだ哉

ヨコタ

万三

それながら苔の花の手向哉

ヨコタ

酒仙

ちり行や今は御法の花の友

ヨコタ

泉志

【三十二】表

聞きもあまわれ花より先へちりしとは
 散まじきもの、哀やちり椿
 したはれし花より先にちるあはれ
 永き日の首途を長き別れとは
 霜にけふ先立つ友の別れ哉
 是聞けと花もちる日や烏啼
 夜は夜とて塚に蛙の鳴明し
 雨やいかに咲まべき花の散まふとは

、 時習

、 ミトヤ 魯川

、 寸松

、 牧牛

、 東明

、 長浦

、 今市 松山

、 此橋

【三十二】裏

花見にと旅から旅へあゝ悲し

カモ 素琴

古人も多く旅に死せるありとぞ。

浮雲流水の身のはかなき行末を

いへるなるべし。爰に徐行が

旅行はその類にはあらず。浪花に

いさ、か世用もあれば、大和路の吟行

より都の春をなど思ひ立て、

播磨がたをや、過つ、津の国

なるかはら町とかいふ所に旅寝

【三十三】表

して、つとめての朝、又旅立(レ)んと
せしほど、何のなやめることもなく、
矢立の筆(ヒト)を(ヒ)持ながら息絶(ヒ)ぬと、

伴ひしたがふ人々おどろき

さはげども、かひなし。ア、いかなる

此日(ヒ)此時(ト)ならん。さてしもある

べきことならねば、せめてと

遺骸をば櫃におさめて、昼夜

のわ(マ)るだめなくいそぎ、古郷へ

帰りしとぞ。我も吉野、花の

詠め共にせんことかねての

ささやきもあれば、きさらぎの末、

先(ツ)とて、大馬木の里まで杖を曳(ヒ)

侍りけるが、はからず足をいたみ

て、ほ(マ)るなくおもひやみぬるにぞ。

【三十三】裏

さるを以文子(マ)が信(ヒ)にとどめられて、

いまだ其亭^①にありき。豈^たはかり

きや、かかる嘆きのいはんかたなく、

胸ふたがりて、

なきがらや何と小蝶の夢うつ、

今市

魚坊

前書きありて

足跡もきへ行霜^{マヤ}の別れかな

備前岡山

松雨

徐行といへる雅士、年いと若きに

風雅の志深く、此春^②、吉野、花

見ばやとおもひ立て、播磨・津

【三十四】表

の国の浦づたひせしが、兵庫の

駅過る^③比しも頓^{とみ}に身まかりぬ。

国にて親しき人々の嘆き、

今はの際の其身^④のおもひ、いかに

やはあらん。其友^⑤石明のぬしより

処の便りにつたへ聞て、悼^⑥の心を

申こおくる。

せめてなり世の見納に須磨の花

名録

森々庵

其外の山もなつかしほととぎす

魚坊

東雲や鳥にまじるほととぎす

路考

いつ来たか袞ふるへばきりぎりす

草肥

【三十四】裏

足跡に又ふたつ三つ田にし哉

嵐岫

瘦馬の耳にすげなき霰哉

何遠

猷立を客に嗅る、独う活ど芽め哉

洞李

機音の六日はせまわしま女七夕

行周

麦畠に道つけられて桃の花

道楽

炭の香や花の咲たる木なるべし

長浦

菜さい籠ろうに飄ひらきる日や初時雨

素琴

花を吸ふ蝶はかくれて牡丹哉

以文

【三十五】表

さびしさは何羽立ても沢の嶋

石明

君が代や山のうへにも菜種島

森々庵

四 季

古人
遅日庵徐行

日の長ミダひ事を知けり春の雨
常は氣の付ぬ沢なりあやめ草
破れく秋もくれ行芭蕉哉
焚ほどは焚ても庵の落葉哉

【三十五】裏

遅日庵徐行は、亡父以文が舍弟にして、若きより書画は自然のあやどりに賢く、俳諧は風流に心高く、文雅の英才を人々賞し合へりけり。ひと、せ旅立（三）事ありて、石明が終焉の記にあはれをとめて、うからやからの嘆きとはなり侍る。予、その比は実家において膠漆の因み深く、

【三十六】表

峩々洋々の交りにして既に断琴の
思ひなりしが、はからずも此家の⁽²⁾
養子となり、予は爰にとゞまり、

徐行は旅に魂をとゞむるも、いづれか
幻の世ならざらん。されば其比追悼の⁽²⁾
営ありしを、こたび五竹庵師の⁽²⁾
雷斧を乞、ともに一冊子とはなし侍る。⁽²⁾
塚は仏山の麓にありて、日比言⁽²⁾
置る梅を植しが、みじかき命⁽²⁾
を花にとゞめて、長き此世の⁽²⁾
記念とはなり侍りぬ。

今もその梅に経よむ鳥悲し

東下